慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カロリン・ フォックス女史とジョン・ スチュアート・ ミル (二)
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.4 (1923. 4) ,p.585(89)- 602(106)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230401-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

至り七月十五日の支拂實行が再び出來ぬと賠償委員會に通知したので賠償委員會は約千八百萬金貨馬克を獨逸より現金を受取つて未だ分配を了しない間の利息や賠償委員會が獨逸の染料を米國織物組合に賣却した代金等の中から獨逸に貸渡して五千萬金貨馬克の七月分の支拂を終了さした、かくて八月末の賠償委員會で八月九月の現金支拂及びその間に他の協定成立せざる限り十月乃至十二月の現金支拂に對し六ヶ月期限の獨逸大藏省證券にて支拂ひ、之を全部白耳義に交付する事にした、かくの如くして獨逸帝國銀行裏書、英蘭銀行支拂の大藏省證券一九二三年二月十五日期限四千七百四十萬金貨馬克及び三月十五日期限四千八百六十萬金貨馬克の二種に發行して賠償委員會へ交付した。

七、獨逸の支拂總額

以上の如く休戰以來獨逸が支佛した金額は、非常な、巨額であるが、物資掛や何かがあり、其の評價問題が出たりするので正確に計算する事が六ヶ敷い、例へば獨逸はベルサイユ條約第二百三十五條で一九二一年四月末日迄に二百億馬克を支拂はなければならぬ、然るに佛蘭西は八十億馬克しか支拂はぬと言ひ、獨逸は二百億馬克を支拂つたと主張して居る樣な譯である、また英國議會で一週間以内に大藏尙書と大藏省參政官との報告とが異つて居つたりして居る。

次に最近發表された相當信憑すべき數字を掲げて見る。

一、休戰當時より一九二一年四月迄

	金貨馬克
現金拂	一一二、一二一、〇〇〇
物資拂（原料等）	一、二五一、〇六四、〇〇〇
休戰條約による引渡	一、一八三、二二六、〇〇〇
海底電線	四九、〇〇〇、〇〇〇
動產	二、五〇四、三四二、〇〇〇
合計	五、〇九九、七五三、〇〇〇

一、一九二一年五月より一九二二年四月末迄

現金拂	一、三一三、六六〇、四九六
現物拂	五六〇、四七五、四一七
休戰條件による引渡	三、六七八、八一六
合計	一、八七七、八一四、七二八
總計	六、九七七、五六七、七二九

即ち六十九億七千七百五十六萬七千七百二十九金貨馬克である。

その後の物資拂は未だ計算されて居らぬが現金に於ては一億三千二百萬金貨馬克を支拂つた、之れが累計は七十一億九百五十六萬七千七百二十九金貨馬克である、その外大藏省證券で九千六百萬金貨馬克を支拂つて居る。（一九二三、一、一二）

カロリン・フォックス女史とジョン・スチュアート・ミル（二）

榎本鑛治

四

Caroline Fox 女史と John Stuart Mill との初對面の翌日、即ち一八四〇年三月十七日附の日記には、次の如く女史は記して居る。

「午後 J. S. Mill を訪れた。彼は午前中弟の病室に時を過した。私達は隨分面白く語合つた。殊に彼は、自分の經驗より、彼の弟妹に有益であると思はれることを、多方面に亘つて話した。

彼の話に依れば、今日彼は、George Grote の

家に、Francois P. G. Guizot に會見する筈であつたと」(Memories of Old Friends, edited by Horace N. Pym, 1882, pp. 69-70)

翌三月二十日附の日記を見ると、此日 Fox女史等は、Henry Mill を見舞つたのである。即ち「Henry Mill は昨夜も平靜であつたと兄の John が云つた。Henry は、私が遊び戯れる子供や望遠鏡を手にする人や、總ての人に同情する人生に就て聞せたら大變喜んだ。私は、Allan Cunningham (詩人且文學者)が此地に居る旨を、John Mill に話した。殊に彼は、John Sterlingや私達と知己になつたことを愉快とした。何故と云ふに彼の話に依れば、相互に尊重敬愛する人を紹介されることは、大變喜ばしいからである。彼は、John Sterling に就て熱心に語つた。そこで私が、Sterling は深邃な問題に就て會話の時よりも著述の方が遙かに漠然とし、又錯雜して居る旨を告げたら、彼は直ちに、『夫れはさうです、談話の場合には、貴女にしても、貴女と話して居る人の特殊な心持に話し掛けるのですが、著述の場合には、貴女は、夫れを恰かも理想的對象に話し掛けるやうにするのですから』と反駁した。『夫れでは私は、或書物に種々な問題を求めることが出來ませんねえ』と私は云つた。是れは、嘗て Platon から敎へられた所なので、私は此理由から、種々な書物を讀むのを餘り有益なことではないと考へて、常に議論を好んで居た。『如何にも其通りです、若し貴女が自分自身の種々な觀念——思ふに思索的主題を指すならん——を形造ることが出來れば、讀書などは無益です、併し貴女自身の自己意識に於ける或事柄に應答する他人の觀念の中に、何物かを見出すのは、非常に愉快ですよ』と Mill は附加へた。彼は植物研究家なので、Anna Maria は Argois の巖窟にある光苔に就て話した。Mill の話に依れば、總て燐光の本質は、未だ不明であるが、太陽の光線を借りて放射する一種であらうと一般には信じられて居ると云ふ。そこで私達は、Pendennis の巖窟へ出掛けた。……

Mill の提案に從て、私達は點火したまゝの蠟燭を、巖窟の守護神への供物として殘して來た。彼の話は、大變興味があつた。Mill の云ふには、充分帆を揭げた船は、總ての場合に於て自然と和合する人間の唯一の仕事である。其理由は、夫れこそ自然の要求一切に全く順應て居るからである。無限の觀念に就て太古の人々が抱いて居たのは、私達の居住する宇宙に關してのみである。何故に太古の人々は斯の如く限定されたのか、夫れを正確にしたのは、近代人の種々な發見の結果である。併し私達には、夫れ以上に研究することが殘つて居る。即ち無限と云ふものがある。物質的宇宙は、小兒の無邪氣な心に比ぶれば狹小なるものである。小兒の心は、物質的宇宙を總て包容し得て、尙ほ餘りあるからである。彼は、昨年（一八三九年）の伊太利旅行に於ける見聞や、羅馬法王の偏狹な政策より體驗した迷惑に就て物語つた。即ち羅馬加特力敎と、其慣習とは、人々の間に大なる、又常に增加しつゝある侮蔑を以て行はれて居る。法王が、市中の廣場に於て祓淨式を施す時に、脫帽するのは、官吏だけである。是れは輿論の强い兆候であると。そこで私は、若し彼等が、彼等の信仰に對して斯の如き侮蔑を感じたならば、彼等は何に賴らなければならないかと質問した。之に對して Mill は、只だ思索し得る丈けであるが、多分新敎の精神は、彼等の現在の信仰に溶解されるのであらう、詳言すれば最も眞面目な羅馬加特力敎徒が、改革に對する

要求を感得し是認するのであるから、彼等は何時かは總會議を召集するであらうと答へた。佛蘭西の婦人が、男子よりも宗教的熱心を依然と表示して居ると物語つたが、Mill は夫れを考察するのに、彼地の舊蔽家連が正規的に教會に參列し、又之を維持して居ると云ふ種類のプレミアムを幾分か附けて居た。僞信を非難される恐怖よりして、是れが誘ふた所は、より強い心に於ける勤行の躊躇である。迷信と儀式とは、離れ去る信仰に於て委棄せられる最後のものである。何故と云ふに夫れは、最も明白なことであり、又人々の僻見と關係する所があるからである。

次に私達は、Martin Luther 及び其他の宗教改革家に言及した。Luther は立派な人間であつたが、併し彼は、道義なるものを、當時に於ける混亂と不幸とより誘導さる可きものとして居る。Luther は人々に教へて曰く、汝等の指導者を離れて考へよと。さうして彼は、人々の俗見が悉皆彼自身の意見と合致するであらうと想像した。併し人々が斯の如く廣汎な、且様々な目的を有した時に、人々の凡ゆる異常錯亂に對して彼自身に其責あることを考へて、Luther は不滿足であつた。さうして彼の宗教改革は、非常に成功したけれど、Luther は其宗教改革を見て、彼自身の紹介せる權威の桎梏より思想を解放した自然的、且必然的成果であるとはしないで、却て彼の釀した擾亂に戰慄したのである。茲に於て Mill は深く感動して曰く、『何人と雖も、苦難を忍ぶに最初充分な決心をなすに非ずんば、彼の時代を利するために如何なることも企つ可きではない。若し彼が費用を計算せずに、開始したならば、彼の一切の計畫は、失望に終らねばならぬ。さうして彼は、或は Thomas Chatterton の如く失望に倒れるであらうし、或は Desideus Erasmus の如く逆流に陷るであらうし、或は又 Luther の如く失望と懊惱との生涯を送るであらう』と。是れは、明かに Mill の經て來た過程であつた。何故と云ふに Mill の容貌は、大變上品で美しくあるけれど、憂に惱んで居ることが充分證據立てられるからである。

最後に Mill は、Luther と同時代の宗教改革家の性質を簡單に物語つた。即ち Erasmus が眞面目に抱いた空想は、彼を特色附けた所の服從的圓滿の品行と、俗向の態度とに依て、彼が宗教的改革を促進すると謂ふに在る。洵に是れは、彼をして帝王、君主に接近せしめたのであるが、彼の友人は、彼の柔軟性と放任主義とのために、非常に其關係を斷たれたのである。Melancthon の天職は、或大運動の首領たるに在るのではなくして、最後まで忠實なる教徒たるに在る、――是れこそ、眞に彼をば Luther に對立させる特色である。宗教改革の及ぼした他の意外な大影響の中には、宗教改革が獨乙語の上に與へた影響がある。Luther の聖書は、獨乙語に極印を附けたり、獨乙語に關係ある力や、精力や、光榮やを與へた。同樣に聖書と沙翁とは、英語に取て、他の如何なる書物よりも貢献した所が大きかつた。さうして英語の精神の中に、斯の如く崇高なる簡單さを以つて言表はされる、斯の如き大觀念を紹介したのであると。」(Memories of Old Friends, edited by Horace N. Pym, pp. 70-73)

五

續いて翌三月二十一日には、夕刻より John Stuart Mill は、John Sterling と共に、Fox 女史の饗應に招待された。其席上談話は、最初專ら

美術工藝に關して居て、例へば Dresden 製の石版刷や、和蘭風の繪畫や、Thomas Hope の建築論や、電氣學者の Sir Charles Wheatstone 論や、山水畫家の Claude Lorraine 論等が、取扱はれた。次に話題は一轉して、理性、自治、及び是等に關聯した問題に觸れた。Fox 女史は、是等に就て極めて卒直に、女史の抱懷する所を述べたと記して居る。又此夜專ら談話の中心人物となつたのは、John Sterling であつて、John Mill は折々、深淵なる觀念に包含された理論や、夫れより發する光明を解說するために、彼の所信を述べたのである。女史の日記には

「結局、一指導原理の觀念は、人こそ異なれ、Socrates や St. Augustine のやうな凡ゆる時代の偉人が、等しく主張した所であると云ふのに纏つた。一體世の中には、常に此道德的眞理に對する證據を蔽ふ所の一沫の飛雲が漂ふて居たけれど、太陽は最も暗黑なる時代に於てさへ、夫等證據の背後に赫々と輝いて居たのである。是れこそ、過去及び現在の各人の中に存在する超人的光明である。さうして其中に明白なる幻影があり、安全と幸福との光榮ある實在があるのである。

併し私達が智的實社會に於て取らなければならない路への指導が、も一つある。即ち Thomas Carlyle に依れば、其指導は、『試みよ、然らば汝は夫れを知るであらう』と謂ふのである。併し John Stuart Mill は、其指導に就て斯う云つて居る。

『汝が、經驗又は直觀に依て誤りであると知ることは、之を總て避けよ、然らば汝は安全である。殊に他人の寫取的模倣(servile imitation)を避け、汝自身に忠實であり、汝の個性を求め、以て其周圍に於て生活し、行動せよ。個性が汝に强ふる其路を熱心に辿り、汝の安全燈に對する理性に從ひ、而して絕えず偏傾(Inclination)を退けよ。然らば汝は、權利と理性とへの服從よりのみ生來する所の自由と、既往を顧る時然る次第を證據立てゝ居る所の幸福とに到達するであらう。何人も此處に置かれて行爲する本分を有して居り、而も熱心に其行爲を仕遂げなければならぬ。總ての進步は、野心と誇示とを刺戟する獨特の罠(ワナ)を有するものではあるが、併し人智未開の時代に於ても、熱心に探求したならば、或は煌々たる光明と眞性とに、流浪者を導く所の北極星(Pole Star)が發見されたかも知れない。吾々の行爲に惡と見えるものがある時、若し充分に吟味されるならば、夫れは、權衡を失つた善であり、また指導を誤つた善である。何となれば造物主は、生命ある萬物の上に、彼自身の影像を打込んだのであるからである』。

今夜は隨分種々な收獲があつた。詩に就て、眞理に就て、美に就て。併し私は、夫れを悉皆記すことは出來ないから、今私の記憶に充分殘つて居るもの丈けを記すに留めた』。

と結んである。(ibid, pp. 73-74)

翌三月二十二日 Fox 女史は、Clara が喘息と風邪とに惱まされて居るのを見舞つた。Henry は病勢著しく昂進して、恢復の望みは絕えた。彼も夫れを意識して、兄弟や近親に形見を分けた。今迄 Clara と二人で集めた押葉押花を見て Henry が「是れは僕等二人のもので、今に Clara の植物採集の基礎となり、植物研究の資料となるのです」と云ふのを聞いた時、女史は涙ぐんだのである。此日 J. S. Mill は、印度に就て面白い話を女史に語つた。日記には左の如く記し

てある。

「Mill の話は、印度の政治史、英國統治下に於ける印度諸侯の利益等であつた。英國の印度統治方法は、君主と諸侯とを退位させて、彼等に年金を給與し、以て內亂を避け、又敵對的武力に依る彼等の滅亡を除くに努めて居る。印度には國民性が殆んどない。若しあるとすれば、夫れは、常に文明を阻害するものに相違ない。印度の國內は、境界が不明であり、國民の怠惰は、總ての改善を妨げて居るが、不思議なことには、素質と慣習との優柔さは、一般に婦人間に存する知覺の敏速と精緻とに補はれて居る。又英國と印度諸侯との同盟に包含された條件、及び履行し難き、諸侯間との誓言のために、印度に於て正義は頗る行はれ難い。又印度に於ける基督教發展の遲々たる理由は、本來印度國民の性質に精力の缺乏して居ることに依ると共に、歐羅巴人の最初の例證が、太平洋諸島に於ける宣教師の如く、基督教と文明とを促進する任務に全精力を傾注する底の人物ではなくして、單に政治に關係する人物であつたと云ふ事實にも基くのである。次に Mill は、Thug と稱せられる印度の恐る可き暗殺團に就て物語つた。是れは一種の宗教團體であつて、全員は破壞の女神の信者であつた。さうして其女神の崇拜者以外の者は、供物を献ずることが出來ないのみならず、或制限上供物を献ずるのは、其教義を手解きされたものに限られて居る。彼等は、婦人や通行人を無暗に殺すものではない。要するに彼等は、宿命論者であり、兆候信者であるが、最近に及んで或種の兆候を輕視するに至つた。さうして『吾が時期は到來せり』と稱して、彼等は英國人に接するやうになつた。今日に於ては殆んど其一團は絕滅された。即ち印度に郵便制度のないこと、及び印度人の無學であることが、斯の如き惡漢の仕事を一層助長させ、又團員の人數を容易に知らさせないで置けたのである。以て如何に印度が文明の利益に浴することの間接的であるかゞ分るであらうとの話である（ib id., pp. 74-76）

Fox 女史の二十二日の日記は、以上で Mill に關する筆を擱いてある。翌三月二十三日の日記には、女史は Clara を伴つて散步したと記して左の如き簡單な叙述のみで終つてゐる。

「其際 Clara は、如何に父 James Mill が John Mill を教育したかを語り、John には所謂子供の時代を享樂する時がなかつたと話した。是れは彼の一大不利益と考へた所で、之がためにや、John Mill は嘗て、『私の禿頭になつたのは、貴女が極く小さい時ですが、未だ是れでも當年二十二です』と云つたことがある。Mill は、如何なる問題にでも興味を感じて頷く時には、能く斯の如き滑稽を口にする」。（ibid., p. 76）

六

翌三月二十四日附の Fox 女史の日記に依ると、夕刻より John Stuart Mill は、女史に招かれて食事を共にしたのである。其際彼は、弟 Henry の容態に就て話した後、彼の經驗上、一家の離散して居ることは甚だ悲慘なものであると、苗木の移植に準へて說いた。何故と云ふに彼の弟 James Bentham (James Mill の次男) は、東印度會社の派遣員として印度に滯在中であつたからである。更に話は移つて、人の名 (christian names) に及んだ。

「加特力教國に於ては、名の所へ全然姓を附けぬが、併し或人と彼の名に同じの聖者とを結び付けるのが常であると說明して、Mill は云ふ。『さあ、さうすると私は、聖 John the

Baptist 等の庇護を受ける譯ですが、左樣な聖者のなす仕事は、未だ外に澤山あるから、差當りもつと劣等なデモ聖者の庇護を求める方が賢明ですかね』と。次で話題は、Conversation Sharp (Richard Sharp) へと一轉した。Mill は、Sharp と彼の父 James Mill との談話が非常に面白かつた由を告げた。兩者の談話の一部は、Sharp の『論談集』(Essays and Conversations) 中に收められてあると云ふ。Mill は最近 Coleridge の哲學的性格に關して非常に分り易い論文を公にしたので、（一八四〇年三月號の London and Westminster Review 誌上に發表した Coleridge 論を指すものにして、後收めて『論集』第一卷 Dissertations and Discussions vol. I. の三九三頁乃至四六六頁に在る）詩人としての Coleridge 論を書く積りか何うかを質した所、彼は否と答へた。さうして其點は、現に Wordsworth が發表して居ると附加へた」。(ibid., pp. 76-77)

翌三月二十五日の日記に依れば、Fox 女史の家に、John Mill と John Sterling とが落合つたらしい。其際 Mill は、彼の性格と Carlyle の性格とを比較した後、兩人は別段に交際もしないが、非常に親密である旨を告げたと記してある。而して左の如き Sterling の言も引用してある。曰く

「Mill の意見は著しく抽象的である。而して彼は深遠な感情を持つて居るが、頗る詩的情緒に乏しい。彼は現時に於ける最大の科學的思想家であつて、此點は遠く Coleridge の及ぶ所でない。前者は後者に比して、より永續的であり、又より猛烈である。之に反して Coleridge の絹糸に似た推論が往々打壞されるのは、純金の糸を織交へたがためである」と。(ibid., p. 77)

二十五日の日記には、僅かに是れ丈けしかなし。

翌三月二十六日の日記には、Mill に全然關說しなかつた。

次に二十七日の日記を見ると、Fox 女史の兄 Robert Barclay が多忙の身にも拘はらず、Penjerrick を訪れたので、John Sterling, John Mill, Clara Mill, Anna Maria, Robert Barclay, 及び Fox 女史の六人で大戸外餐宴を催したと記してある。食後附近を散步しながら、種々の問題を論じたが、先づ Sterling の獨乙及び獨乙人論があつた。次に Mill は、彼と Sterling との交際は一八二八年劍橋の討論會 (Debating Society) に於ける兩者の激論以來のことで、其時 Mill はベンサム主義者として現はれ、Sterling は神秘主義者として加はつたであるが、爾來兩者の溝渠は次第〳〵に狹小になりつゝあると告げた。夫れから一時 Carlyle や Edward Irving の宗教論等の話になつたが、更に話題は政治學へと轉向した、此時 Fox 女史は、果して世人が眞に哲學的急進主義流の政治を要望するものなりや否やを問ふた所、言下に Sterling は現狀を以てすれば不可能であると說明した　之を聞くや John Mill は嘆息して曰く、「私は長い間其實現のために出來得る限り努力したが、結局無效であつた。夫れ故私は世人を見捨た。イヤ逆に云へば私は世人に見捨られた」と、

茲で話は飛躍して肺病に移つた。肺病は、先づ精神と組織とを早熟の域に齎らし、斯くて次第〳〵に肉體を衰弱させるのであると云ふ話の後で、Mill は靜かに口を開いて、「私も肺病で死ぬやうに思はれる」と云つた。其處で Fox 女史は、呉々も養生をするやうにと說いた所 Mill が「私は何で死んでも構はない」と答へたので、女史は「併し私達同胞を救濟しやうと希望する

者には、時間が大切ではありませんか」と抗言した。すると彼の返事は「如何にも其の通りです。假令僅かでも、世の中へ盡すのは愉快なことですから」と云ふのである。此時 Barclay も加はつて、話は一入彈んだ。J. S. Mill の考へに依れば、實際と思索とを一致させるに努めることは、人生の義務である。現に Mill 自身の經驗及ひ觀察を見れば、實際は思索に與へるに、勇氣と體系と有效とを以てして居るのみならず、彼は多忙な一日に於ける二時間の方が、自由になる一日よりも遙かに澤山書くことが出來ると言つて居る。又 Mill は、多年青年の發展に留意し、且最大の知的進歩をなす者は、其思索的人物に比して遙かに幾多の不利益を忍ぶ時に於てすら、尙ほ實際家の部類に屬する事實を會得して、遂に精神の活動を促進するものは、實際の慣習に優るものなしてう結論に到達した。之を聞くや Barclay は、自己の現在の知識を以てしては、到底彼自身の精神中に明示された目標に迄到達することが不可能であると大いに悲觀した。之に應じて Mill は曰く、「多く是れは、絶えず反省した人の場合である。Carlyle に從へば人間の努力は、次の二種に區別される。即ち一は然かある努力で、他は然か見える努力である。前者の目的は高く、而して夫れは到達されぬけれど、此努力こそ、努力者の性格に精力を與へるものである。之に反して後者は、或は欺き或は欺かれて思案に暮れながらも、所謂努力を口にする時には樣々の術語を用ひ、又術語其物が夫々實在を表示して居ると信じて居るけれど、是等は、云はゞ恒久不變の位置に運命附けられて居るのである。自己欺瞞と他者欺瞞とは、相互に作用して迷想を增すものである。斯くて智的追求に於ける落膽に遭遇するのである。此場合に於ても亦、汝は常に高く目的を掲げなければならぬ。汝のなすことが汝を喜ばせぬ場合に於ても、尙ほ夫れを信賴せよ、落膽せずに夫れを再三再四繰返せよ、同時に汝は、汝の潔癖を抑制しなければならぬ。而して汝の判斷と好惡とを、汝の實行の進捗に際して、餘り懸け離れさせてはならない。然らずんば、汝の熱心は鈍るであらうし、又汝は何事をもなさぬことゝなるであらう」と。(ibid., pp. 77-80)

二十七日附の日記は、尻切蜻蛉のやうに是れ丈けで擱筆されて居る。

七

翌三月二十八日 Fox 女史は、John Mill と Clara Mill と共に、Pennance 及び Penrose の方面へ散歩した。今女史の日記を辿つて、其途次兩者の交へた話題を見るに、最初は米國に於ける唯一神教徒、長老派教徒、及び組合教會教徒に關して居た。而して Mill は、米國の共和政躰が早晩恐らく君主政躰に變るであらうと考へた。即ち彼の見解に依れば、米國に於て殊に王黨主義の精神を育成するものは、富裕階級の感情であるが、而も彼等は、必ずしも他國に於けるが如く、王黨主義に敬服して居る譯てはない。換言すれば米國の富裕階級は、他國にあつて米國にない所の文學、歷史、及び傳奇を切望する餘りであると、茲で話は、逆戻りして女史の兄 Robert Barclay と、Mill とが、昨日語合つたことに移つた時、Mill は云ふのに、「イヤ、昨日の談話は、正しく私が Robert Barclay 君に就て知る所と、知らぬ所との間に存する相違を示すものです。併し假に私とすれば、私自身が今迄に經驗して來た失望、落膽に就て、少しでもお話しするのは、其聞手に取つて往々非常な助けとなるものです」と。次に Fox 女史と、Mill

との會話は、獨乙人の思索的性格が何に基づくかと謂ふことになつた。女史の日記には、左の如く Mill の所說丈けを記してある。

「之に就て Mill の重きを置いた所は、獨乙に於て殊に鞏固であつて、又其情況上喚起された家庭的の情愛の影響、是れである。次に獨乙人は、英國人の如く、富裕となり、若くは富裕らしくなるために不斷の努力をするものでない。併し唯だ彼等自身を主とする底の幸福の觀念のみを以て、平靜なる思索に耽る所の慣習を持つて居る。即ち彼等の幸福の諸要素を彼等自身に會得すると云ふ此不變的慣習こそ、獨乙に悠々たる調子を增ー與へるものである。而して獨乙の各大學の敎授は、其講義に感情を交へ、更に知識のために知識を愛すてうことを添へるのである。殊に Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling に於て然りである」。

獨乙に關聯して兩者の話は、伊太利へと轉じた。Mill の說く所は、伊太利人も亦或意味に於て自國を壯嚴化して居る。是れは、光榮ある羅馬の追憶に浸る結果である。伊太利人の形姿は、正しく Raphael や Titian 等の描寫した通りであつて、藝術の研究が伊太利に於て然かく成功するのに役立つことは、非常なものである。而して伊太利人の大なる感覺性と情性とは、畢竟音樂が普ねく行はれ、又伊太利の儀式が壯嚴であると云ふことに基づくものである。斯く論じて最後に Mill は、Conversation Sharp の敎へた婦人に對する眞の嗜みを擧げて輕妙に其話を結んだ。曰く、讀書を好むこと、及び散步を好むこと、是れである。(ibid., pp. 80-81)

翌三月二十九日附の日記に Fox 女史は、左の如く記したが、此日は Mill の訪問を受けたらしい。

「John Mill は、目下私のために芳香ノ曆を作製中で、夫れは、月々に順序を立て、月桂樹に始まり、シナノキに終ると云ふ。(此曆は次號に掲ぐ) 夫れから彼は動機の說明をした。即ち如何なる動機にせよ、夫れを餘りに穿鑿することは、青年のために好ましくない。寧ろ青年をして諸般の行動を批判させるに如くはない。然らずんば、貴賤の不思議なる混淆を見て、青年は失望に陷る恐れがある。然るに又卑下の中に自尊がある。斯る總ての自尊に打勝つ唯一確實なる方法は、神の恩惠を懇願することである。一體青年には、自己を知る明が充分でない。青年は、經驗と熱心なる吟味とに依てのみ、自己の力及び弱點を會得することが出來る。故に青年は、充分圓熟して自ら批判し得るに至る迄は、自己に就て他人の見解と別個のものであると考へてはならぬ。吾々の性格には、日夜に非常な變化がある。此變化こそ吾々の能力を擴大し、以て他人に同情させ、如何なる苦鬪に遭ふたかを記憶させ、斯くて同一の苛責を凌ぐ難易を評價させるものである。今若し性格に於ける變化が、法外のものであつたとすれば、人は往々彼の過去に於ける過誤と弱點とに對する一種の個人的憎惡を固執するやうに見える。而して其苦鬪を忘れて、其人は同情の何たるやを解せざるに至るのである」。(ibid., pp. 81-82)

次は飛んで四月一日である。此日醫師の Calvert が Fox 女史を訪れた。彼の話に依れば昨夜 John Mill は、頭痛に惱まされながら、クェーカー宗の說敎師 John Woolman の歡喜や、精神的宗敎論等に就て物語つたが、之に Calvert は大變感動させられたと。尙は此日の日記には、Henry Mill が醫師を手古摺らせた事が書いてある。

翌四月二日の日記に依れば、Fox 女史は、Mill を訪れたのである　其時 Mill は寫眞を撮らせて居た。又 George Mill (James Mill の四男) も、見 Henry の見舞に來た所である。後 Mill は、禁酒論を試みて曰く、「抑も禁酒主義は、恰かも人間は無爲に與し、又之を誓はなければならぬと云ふが如き愚劣な觀念に思はれるけれど、實驗の結果は次第〳〵に禁酒の是なるを證明するのである」と。(ibid., p. 82)

翌四月三日の日記は、原本にない。直ちに四日附の日記を見ると、Fox 女史は Truro より歸宅して、始めて Henry Mill が今朝十時半に死去した旨を聞いて驚いたと記してある。(ibid., p. 82)

翌四月五日の夕方、John Stuart Mill の差出した小包が、Caroline Fox 女史の手に入つた。是れは、初號以下の "London and Westminster Review" 誌であつて、中には Mill 自身で種々の注釋を加へた所があると云ふ。女史は、此寄贈に對して「洵に價値ある結構な贈物である」と感謝の辭を述べて居る。(ibid., p. 83)

翌四月六日醫師 Calvert が來訪して、Fox 女史に、Henry Mill の臨終に於ける彼と、Mill との對話を物語つた。即ち Henry の死床の一方に立つて Calvert が「斯る光景を見ると理性が消えて、信仰が起ります」と云ふと、他方に立つた Mill は、「さうです」と力强く答へた。是れが當代一流の純正哲學者の言である丈け、如何にも敎へられる所があると (ibid., p. 83)

翌四月七日 John Mill は、女史を訪れた。先づ話は、クェーカー宗の宗規と組織とに始まつた。次に Mill は、クェーカー宗徒 John Woolman の哲學に就て物語つた。彼に依れば、Woolman の哲學は、神の直接の敎へに依賴するのであつて、夫れは總て普通の見解、即ち總ての利己と離れ、又之れに抗して、基督敎と根本的に一致し、若くは矛盾する見解を明かにして居ると云ふ。Mill は未だ十歲に滿たずして、Sewell と Rutty との共著に係る「クェーカー宗史」(Histories of the Quakers) を讀んださうである (此點は J. S. Mill, Autobiography, p. 8 を參照ありたし)。John の父 James Mill は、クェーカー宗徒の讃美者であつて、他の如何なる宗敎團體よりも人類に盡したと考へて居た。最後に J. S. Mill は、十分一稅に對するクエーカー宗徒の態度を賞揚した。彼は、統計上最も長命を保つ職業を加特力敎の僧侶となし、之に次ぐ者を新敎の僧侶となし、之に反して最も短命なるものを國王と乞食とであるとした。

尙ほ此日の日記の最後に The London and Westminster Review のことが書いてある。此雜誌は、今後 The Westminster Review という標題の下に Hickson が經營する筈であると云ふ。(此點は J. S. Mill, Autobiography, p. 220. を參照ありたし)。Hickson は自ら Mill の弟子であると公言して居るし、John Mill も「私が今迄に持つた最初の弟子」と言つては居るが、Mill も實際上兩者の見解の相違を是認する程であるから、雜誌の內容も恐らく著しい變化を來すであらう。從來同誌は、利益本位を棄てゝ、讀者本位を採つて居たと云ふ方が適當である。何故と云ふに每號の發行部數は、僅々千二百冊に過ぎなかつたけれど、讀者は夫れ以上であつたからであると。(ibid., pp. 83-84)

翌四月九日の日記の後半に於て、Fox 女史は Mill 兄弟を訪れた旨を記して居る。話は Jeremy Bentham に始まつた。Bentham は、長い間彼等の隣人であつた。(此點は、A. Bain, James Mill,

a biography, pp. 72-73; J. S. Mill, Autobiography, pp. 54-56; W. L. Courtney, Life of J. S. Mill, p. 15. を併せ讀むと面白い)。Bentham は非常に温厚な人物であつて、常に Mill 兄弟を可愛つた。Bentham と James Mill とは極めて親密であつたから、兩人は相談して長子の John を敎育することになつたのであると云ふ。話は Carlyle にも及んで、彼は獅子狩に臨んだ婦人のやうな恐怖を抱いて居る等と語合つた。(ibid, p. 85)

翌四月十四日の夕刻 John Stuart Mill は、勤務先東印度會社の招致に接して、倫敦に歸つた。此日の日記に Caroline Fox 女史は、女史の Mill 觀を書いて居るが、夫れは次號に讓ることゝする。

社會思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（四）

奥井復太郎

一四

ラスキンのオクスフォード生活に就いて直に吾々の頭に浮ぶものは、家庭以外には何等交渉を有せず、人との交際の方法さへ辨まへない彼が多くの、比較的に世間慣れた學生の間に初めて投ぜられた、其時の彼の姿である。(學校生活に就いては既に Thomas Dale の經營せる學校に入つた事を述べたが其處に於ける彼と學友との交渉に就いては Præterita, I, § 92 參照)附近との交渉の殊に少なかつた郊外の家に、僧庵的に世間とは隔離せられた生活から今や離されて新たに放り込まれた社會は彼とは全然絶縁した兩極であつたに相違なく、從つて其處に於ける彼の地位は極めて絶望に近いものであつたであらう (E. T. Cook-The Life of Ruskin, vol. I, p. 53)

既に彼自身の覺悟してゐた如くに、朋友から受ける嘲弄は何人も、想像する所である。(Præterita, I, § 215)併しかゝる世間慣れない青年に對して更に不利益な事情があつた。それはオクスフォード入學と云ふ事がラスキンをして今や彼の力一つで世間を渡つて行かせる機會となつたにも拘らず彼の母が遠く離れ住む事の懸念からオクスフォードの High Street に居を構へて彼の面倒を見ようとした事である。オクスフォードの學生にとつては親が一緒に來ると云ふ事が珍らしい事であつたが更に此の事は彼の年頃の青年が極めて嫌がる『親の面倒を受けてゐる』と云ふ非難を彼に蒙らせる事になつた。(Cf. Ada Earland—Ruskin and his circle, p. 37)彼の母が彼についてオクスフォードに來た理由を彼は自敍傳の中に說明してゐる。

『讀者は、私の母が私と離れる事が出來ない爲めや又は私を信用してゐなかつたと云ふ樣な理由でオクスフォードに行つたのではない事を知つて戴きたい。母は何か事の起つた場合や又急病なぞの時に手近に居ない爲めに行つたのである。母は常に私のお醫者であり又看護人であつた。屢々時を得た母の注意が最も重大な危險から私を逃がれさせて呉れた。此の場合にも母の此の氣遣は、後に知る如くに後で起つた事件によつて是認せらるゝ事になつた』(Præterita, I, § 226)

ラスキンは夕方からトムの鐘が鳴るまでを毎日 High Street の母の下で過し其の日の出來事なぞを語り合ふた。彼の父は土曜日に此の地に